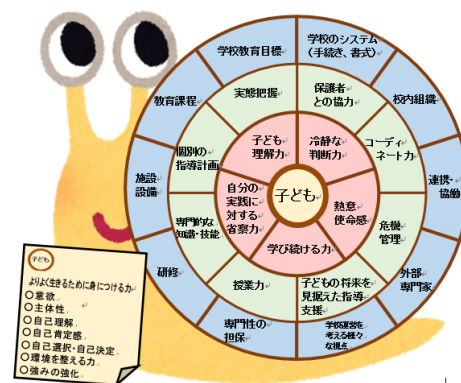


校内研究テーマ

チーム網養1000日プラン

一人一人の強みをいかした学び合い

～子ども達の「よりよく生きる」を支えるために～



1 はじめに

平成31年度 学校経営計画本年度の重点

- ① 児童生徒の自立に向けた実践力の充実と授業力の向上
- ② 教職員自ら職責を果たし、組織的に課題解決を図る協働体制の推進

●研修部は、教職員の「研究」を推進します

- ・全体計画
- ・ベースづくり
- ・研究をするのは、“研修部”ではなく“個人”です

●「研修の型」を学ぶ

- ・「研修とは？」何をすればよいのか
- ・網養スタンダードの見える化(素地づくり→専門性)
- ・学校の専門性の向上・・・学習指導要領(水準)をもとにした指導
- ・子どもの実態から決まる指導(指導者の想いではなく、学びの履歴を大切に指導)
- ・根拠のある授業づくり
- ・プレゼン力～自分の考え(根拠)を伝える力

●昨年度までの3カ年研究の成果として大きく以下の3つがあげられます。

- ①「3つのアセスメントの3学部共通実施」
- ②「児童生徒につけさせたい力の明確化」
- ③「OJTの充実」

個人の研究 + 学校全体での研究

2 研究推進への考え方

①前年度までの成果

前年度までに行った研究の成果を生かし、さらなる定着を図るための3カ年と考えています。児童生徒の「よりよく生きる」を支えるために、職員一人一人の強みを活かしたり、引き出したりできる研修会や学習会の推進に努めていきます。

②学校長の学校経営計画より

研修を通じて肢体不自由教育の専門性を学び、様々な実態やニーズ(様々な障害種)に応じた指導や支援に応用した実践ができる力を身に付けられるように努める。

- ・理論に基づいた実践(適切な実態把握を行い、根拠に基づいた授業の改善を行うなど)を積み上げ、評価・改善を通し実践力の向上を図り、学校としての指導事例の蓄積を行う。
- ・専門性向上のための話し合い＝授業づくりのための議論や協議の経験(授業研のポイント・・・ピンポイントで、子どもが伸びるには、なぜこの目標か、なぜこの教科か、反省ポイントの絞り込み、授業者はこの子にこのような場面があった際にどうアプローチするのか、など)

③「網養スタンダード」について

若手教員や経験の浅い教員の人事配置は今後も全道的に否めないでしょう。その時に「網養スタンダード」として、学校として備えるべき力のベースラインを明確化することで校内人事によらず、子ども達への指導や支援ができると考えました。本来、支援計画も指導計画も担任が代わった時に目標が変わるものではありません。なぜなら、担任の想いではなく、子どもの実態を把握し、その子の願いやニーズに合わせて作成しているものだからです。

④「教員育成指針」

北海道教育委員会は「教員育成指標」というものを作成し、それぞれの校種や教員のキャリアステージで身に付けな

ければならない指標を示しています。しかし、本校の職員構成を道の指標に照らし合わせると、示されたキャリアステージに比べ、本校の実情では一つ上のキャリアステージの役割を果たすことが望まれます。

「北海道における教員育成指標」(平成31年3月一部追加あり)

【 教員育成指標スタンダード 】				
「養成段階」…教員養成大学などで学修している段階 「初任段階」…初任段階教員研修の受講対象となる時期を中心とした段階 「中堅段階」…中堅教諭等資質向上研修の受講対象となる時期を中心とした段階 「ベテラン段階」…学校運営の中核を担いつつ、若手教員等への指導などを行う時期を中心とした段階				
求める教員像	教育者として、強い使命感・倫理観と、子どもへの深い教育的愛情を、常に持ち続ける教員			
キャリアステージ	養成段階	初任段階	中堅段階	ベテラン段階
使命感や責任感・倫理観	・教育公務員として遵守すべき法令や職務等を理解している。	・教育公務員に係る法令等を遵守するとともに、法令等で定められた職務上の義務を果たしている	・教育公務員に係る法令等を遵守するとともに、法令等で定められた職務上の義務を果たし、子どもや保護者等の期待に応える教育活動を行っている。	・教育公務員に係る法令等を遵守するとともに、法令等で定められた職務上の義務を果たすことにより、職場全体の意識を高める。
教育的愛情	・本校で新採用された1年目	・本校で新採用された2、3年目	・本校で新採用された4、5年目	・本校で新採用された6年目～ ・2校目～

※本校でのキャリアステージとは少し異なります…

⑤1年目の研究の成果物として身につく力

- ・学校～指導案集、教材・教具集、組織としての土台づくり(スキルアップ)
- ・個人～授業力(何をどう教えるか、なぜこの教材で教えるのか、授業のデザイン力)、アセスメント力、教材作成力、プレゼン力
- ・全体～理論に基づいた実践(適切な実態把握を行い、根拠に基づいた授業の改善を行うなど)を積み上げ、評価・改善を通し実践力の向上を図り、学校としての指導事例の蓄積ができる。

⑥研究内容や方法の精選

新しい研究主題では、教育理論をつきつめる研修は、あえて選択しませんでした。今回の3カ年計画では、教育理論を参考に実践をすすめる“実践研究”です。当面は、このすすめ方を“本校の研修スタイル”にしたいと思います。また、この研修スタイルが先生方の負担軽減と貴重な成果と課題の共有につながれば、と考えました。

3 研究主題設定理由(研究の目的)

上記の1、2をふまえ以下のように考え研究主題を設定しました。

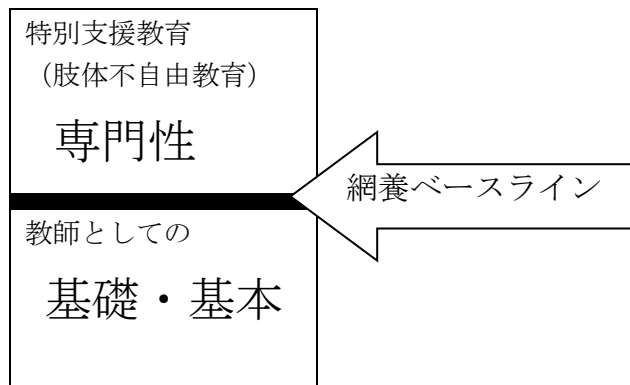
- ①“学び続ける教師”として、授業づくりや教材教具の開発等の工夫改善を通じて研修の基本的な考え方や研修の方法を知る。本校では、これまでも東京都立鹿本学園を参考にしてきましたが、その要素を研修にもアレンジして取り入れてみよう！と考えました。(教務的な部分、研究の部分…)
- ②教員一人一人が網走養護学校の職員として、一人一人の強みをいかした学校運営を目指し、所属感と存在感を感じられる職場にしたいと考えました。私は、それこそが協働の一步だと思いました。
- ③目指す子ども像～平成30年度拡大教育課程検討委員会により、本校の児童生徒につけさせたい力を見える化し、目指す子ども像を設定しました。
 - (1)意欲にあふれ積極的に学ぶ児童生徒(知)
 - (2)心豊かで仲良く明るい児童生徒(徳)
 - (3)元気でねばり強い児童生徒(体)
 - (4)持てる力を高め、自立を目指す児童生徒(知、徳)

4 「網養スタートライン」

① 網養スタンダードのベースラインづくり

これまでの研究からは、教員一人一人のスキルアップが図れていても定着には至っていないことが課題としてあげられている。そのため、先生達が「やりたいこと」と先生達が「やらなければならないこと」を見える化し、先生方の業務の精選や児童・生徒一人一人のニーズや特性にあった指導を充実させられるのではないかな。

→手立て：一人一授業、選択実技研ほか



② 教員一人一人の“良さ”や“強み”をいかした学校経営への参画、学校としてのシステムやパッケージづくり

一人一人の強みをいかせる場を作ることが先生方の所属感や存在感を味わうことにつながり、協働体制の推進を図れるのではないかな。また、指導や支援、つけさせたい力を明確にすることで、何をすれば良いのかがわかり教員一人一人が業務に対し成就感や達成感を得ることにつながるのではないかな。

→OJT、学び合い、主体的・対話的・深い学び、協働、チーム網養、研修の型づくり、1つの目標（研修テーマ）に向かって複数の手立て（個々の研究）を同時に行う（統合型）

③ 学びの履歴の保証ができるのではないだろうか

児童生徒の的確な実態把握や根拠のある指導内容を考えられるようになることで、学びの履歴の保証ができ、指導者が変わっても指導目標や内容が変わることが避けられるのではないかな

→実態把握、根拠のある指導をすることで児童・生徒一人一人の目標や課題にアプローチするための具体的な指導を行うことができるのではないかな。

④ 根拠に基づいた客観的な指導や支援ができると、本人の実態やニーズにあった学びができる。また、その学びの履歴を意識した12年間の一貫した指導と本校の強みを結びつけることで、教員一人一人が自信を持って指導や支援ができるのではないかな。

⑤ 学び続ける教師として

学部中心の研究から個人、学校全体の研修にシフトすることで校内研究を自分の研修としてとらえ、推進することができるのではないかな。また、学部の垣根を越え学び合うことで、網走養護学校としてのチーム力の向上が図れるのではないかな。

⑥ ポスターセッションや教材教具交流の際にプレゼンテーションを行うことで、自分の考えをまとめ相手に伝える力を高められるのではないだろうか。

⑦ 構想図（研究の全体像）→別紙

5 研究期間と内容・方法

(1) 研究期間

研究主題1／3年目として研究を行い、年度末に成果物をまとめ、全体の考察を行い研究紀要として発行する。日程の詳細は、推進計画と推進日程を参照。

(2) チーム網養1000日プラン1/3年目の主な計画

年度	目的	実務	その他
H30まで	・キャリアステージにあった研修方法の習得 ・根拠のある授業づくり ・OJT	・共通のアセスメントツール ・学部研究(研究授業) ・教材・教具交流(教材・教具集) ・ポスター交流(ポスター集) ・選択実技研修	研究主題 「わかる授業・根拠のある指導をめざして」
H31 (R1) 基礎・基本が ため	①実態把握のための共通アセスメントツールの設定及び活用方法	～Sスケール(学習到達度チェックリスト) →学習版の遠城寺式 ～自立活動の実態把握チェックリスト ～J・skep	・選択実技研修 ～年3回、研究テーマに沿った講座の実施 ～OJT:2、3人1組で講師を担当する
	②指導の根拠として	・発達段階に即した学習内容の検討 ～アセスメントで導き出した実態への根拠として、『太田ステージ』、『高次化理論』を使って、ステージ別発達課題から指導内容や方法を検討する※実態とステージの照らし合わせを行う	・縦割り研修(アイズブレイク研修) ～各教科(免許)に分かれ、教科要素表、道徳、キャリア教育、自立活動の区分などについて話し合う
	③実態に即した“授業”づくり ※指導案書式は未定	・指導の根拠(①、②)を基に授業をデザインする ～指導案の作成 ～1人1授業(実施日程が集中した場合は、研修部で調整を行うかもしれません) ～授業のPDCAサイクルを考える。授業1週間前に指導略案を提出し、授業を実施する※個別・集団学習は問わない ～授業終了後の研修日に10分程度の“授業者支援会議”を行う(授業者+3人の支援者(管理職・研修部・主事/チーフ、教務、Co)※教員育成指針のベテラン層による授業改善のアドバイス) ～アドバイスをもらった点を改善し、再度授業を実施する ～授業者支援会議でもらったアドバイス、再度行った授業等を書式にまとめる。 →⑤へ	
	④教材教具交流会、教材教具集 ※教材教具集書式は未定	・授業を行う際に教材・教具の作成を行う ・作成した教材教具についてまとめる ～教材教具集の作成(教材教具の写真、児童生徒の発達段階とステージ別発達課題、指導方法、作成方法を検討する)	

	⑤授業のPDCA	・授業後のアドバイスを参考にし、各自で実践研究をすすめる	
	⑥指導案集の作成 (授業後に指導案につけたす) ※書式は未定	・所定の書式に授業者支援会議でのアドバイスや改善点などを盛り込む	
	⑦プレゼン研修会 (旧ポスター発表)	・指導案集をプレゼン資料とし、授業内容とアドバイス、改善したことなどを交流する。	
R2 ・検証 (やってみる)	・網養スタンダードの見える化 ・個人の専門性の向上 ・主体的・対話的・深い学び		
R3 ・応用力 (発展)	・網養スタンダードの定着 ・チーム力の向上		

★推進日程と実施状況

実施済み		
日にち	個人	研修部
4/25 (木) 5/16 (木) 5/23 (木) 5/28 (火)	全体研修	・校内研究全体計画の説明 ・アセスメントについて (S スケール、自立活動チェックリスト、J・s k e p)
6/13 (木)	学部研修	・太田ステージ、高次化理論の活用方法の説明
6/14 (金)		・北海道肢体不自由研究会理事会～各校の研究計画概要の交流会 (外部への説明)
7/18 (木)	選択実技研修① ・実践研修 ・「主体的・対話的で深い学び」の体験 ・校内の実践例の紹介 ・研修運営について学ぶ	・研修の計画 ・研修を受ける側と運営側の体験ができる研修会の実施 ・講座アンケート実施、調整 ・講師依頼
7/19 (金)	教材教具シート締め切り	・延期呼びかけ
7/25 (木)	1人1授業の説明	・先に実施する授業者 (研修部) の例を通し、流れを説明する ・授業者支援会議の説明
7/26 (金)	教材教具交流会	・延期呼びかけ
夏季休業中	・各自で指導案や教材教具 (教材教具シート) の作成を行う ・選択実技研修の準備	・夏季研修会の実施 ・アンケートのまとめ→中間発表へ ・今後の調整 ・北肢研の準備、発表者のサポート ・選択実技研修講師のサポート
8/2 (金)	夏季研修会 「子ども達のよりよく生きるを支えるために～応用行動分析の視点から」 ・講演 ・学部ごとの事例検討会	・研修会の準備 (外渉含む)、運営 ※他分掌との連携 ・講師：東北福祉大学 准教授 和 史朗 氏
8/21 (水)	選択実技研② ・「主体的・対話的で深い学び」の体験 ・校内の良い実践例の紹介、研修運営について学ぶ ・実践研修	・研修実施のサポート
9/12 (木)	★ミニ講座 (希望者対象) ・高次化理論について教材の分類	★ミニ講座 (希望者対象) ・校内研修に関わる内容のフォローアップ ※希望者の状況により、複数回実施も検討

9 / 2 0 (金)	教材教具シート締め切り ・データで提出（サーバーの研修部内）	・教材教具集の作成 ・作成者へ発達水準や発達課題ごとに分類するためのサポート
9 / 2 6 (木)	教材教具交流会 ・実物の教材体験コーナーの設置、説明など	・交流会の準備、調整
8 月～	★授業の実施→略案を 1 部とデータを研修部へ提出 （研修部→★一人一授業★→各学部） ※小学部～ 1 2、1 月 中学部～ 8、9 月→済 高等部～ 1 0、1 1 月 ※訪問は各学部の合間に実施予定	★各学部教務と各学部研修部員で日程と参観者の調整（※個人の実施日と参観者の調整は、各学部教務主任と相談する） ・支援会議のオーダー ①設定した目標を達成することのできる授業内容や構成だったか、またその改善策について ②発達段階や発達課題に合った言葉掛けを行ったり、教材教具を使用して授業を行ったりしていたか、またその改善策について ・指導案集の作成（略案と改善策を見開きにする予定） ・略案作成の補助、授業実施の補助
8 月～	★授業者支援会議 ・オーダー① ・オーダー② ・支援者からオーダーについて付箋で改善策をもらい、授業者がカテゴリー分けをする ・その中からすぐできそうな改善策を決め、次の授業に生かす ・改善策の実施した結果を記録に記入する ・できあがった記録用紙は研修部に提出する →実践交流会で使用する	・授業終了後に会議実施の声かけ、基本は研修日に実施 ・会議の運営、記録用紙作成の補助

今後、取り組むこと

日にち	個人	研修部
10/1 (火)	・PDFで確認する	・中間報告～研修の進行状況、今後の方向性
10/18 (金)		・指導主事訪問～研究計画、概要の説明
10/17 (木)	★ミニ講座（希望者対象） ・自閉症の児童生徒に対する指導事例について（仮）	★ミニ講座（希望者対象） ・校内研修に関わる内容のフォローアップ ※希望者の状況により、複数回実施も検討
10/30 (水)	選択実技研③ ・「主体的・対話的で深い学び」の体験 ・校内の良い実践例の紹介、研修運営について学ぶ ・実践研修	・研修実施のサポート
11/27 (水)	選択実技研④ ・「主体的・対話的で深い学び」の体験 ・校内の良い実践例の紹介、研修運営について学ぶ ・実践研修	・研修実施のサポート
11/28 (木) 29 (金)		・北肢研～各校の教育課程、校内研修の概要説明（ポスター発表）
1/22 (水) 1/30 (木) 2/6 (木)	学部研究のまとめ ・アセスメント結果の集約、共通理解	・外部講師による研修会の実施を検討（講師の旅費～冬季研修会の予算をまわす）
2/20 (木) 2/26 (水)	実践（指導案）交流会 →旧ポスター交流 ・ポスターセッションの形式（交代制で、自由に見学できるようにする） ・“1授業”の指導案を拡大して掲示する、もしくはテレビで映す。 プラス授業者支援会議の記録を掲示する。説明者は、この2つを基に、授業のねらいや授業内容、実施時の様子と改善点などを説明する。（指導案集にまとめるものを説明する。）参加者は、時間内で自由に、説明を聞いたり意見交換したりする。	・研修会の準備 ・発表の準備
2/27 (木)	まとめ（振り返りシートの完成）	・研究紀要にまとめる内容 研究概要・1/3年目の進行状況・今後の方向性、職員アンケート（振り返

		りシート) のまとめ、選択実技研修の配付資料)
3 / 1 9 (木)	・ 研究紀要の確認	・ 研究紀要の発行 (内容 : 研究の概要・1 / 3 年目の進行状況・今後の方向性、職員アンケート (振り返りシート) のまとめ、選択実技研修の配付資料) → 研究紀要完成後、全校回覧する → 関係機関等へデータの送付

※全体に関わる研修後は振り返りシートを記入する。

※研修日に当てている木曜日をそれぞれ活用し、準備をする。

※1月以降の予定は未定のものもありますので、決定しだい周知致しますのでご了承いただけると幸いです。